

KOGA IDOL

今月の古河っ子

いいこが育つ古河



生沼花穂 ちゃん

(平成29年3月生まれ・女沼)

パパ、ママ、お兄ちゃんもいつも花穂の笑顔に癒されます！
(父：一憲、母：由香里)



松村皇輝(左)くん・美希(右)ちゃん

(平成28年2月生まれ
平成30年4月生まれ・幸町)

いつもここに兄妹♪これからも仲良くすくすく元気に育てね♡
(父：達雄、母：美里)



落合冬馬 くん

(平成30年1月生まれ・高野)

皆を笑顔にしてくれる冬馬君。優しい子に育ててね。大好きだよ。
(父：翔太、母：里美)

お子さんの写真を募集中！ <対象> 0~3歳の市内在住のお子さん <応募方法> メール・電話で受付中。メールのタイトルを「今月の古河っ子応募」とし、本文に「お子さんの氏名(ふりがな)・生年月日・父母の氏名・住所・電話番号」を明記し、hisho.kouhou@city.ibaraki-koga.lg.jp(秘書広報課)へ申し込みください♪



わたしの夢

世界中の子どもたちを笑顔に

富安咲紀さん 総和中学校3年生

私の夢は、教師になって世界中の子どもたちに勉強を教えることです。
「子どもだから」「女性だから」という理由で教育が受けられない人々を救いたいからです。
ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんはスピーチで言いました。
「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペン。それで世界は変えられる」
この一人の教師に、私はなります。



キラリ☆輝く人たち

籐工芸を普及させるために

葵史衣 さん(上片田・83歳)

5月に開催されたモンゴル平成の和魂継承芸術展で蒙日文化振興芸術褒賞とモンゴル創始名誉芸術作家賞を受賞した葵さん。50年以上も制作し続けている籐工芸作品は、多くの美術展などで受賞しています。

自身の技術研さんや籐工芸などの普及に奮闘する葵さんに話を伺いました。



工芸家への転身

東京都で銀行員として働いていた葵さん。「自分で何かを生み出したい」「年齢に関係なくできることを仕事にしたい」と思い、銀行を辞めて工芸家に転身しました。

葵さんが始めた籐工芸やアートフラワーは、当時なじみが薄いものだったので、染料などを自身で調合するなど試行錯誤の連続だったと言います。その努力の結果、芸能関係者に芸術性の高さが認められ、コサージュやブーケをテレビ番組「夜のヒットスタジオ」などに出演する芸能人に作品提供をしていました。

珍しいアートフラワーは人気があり、作成の依頼が非常に多く、制作に追われる日々でした。その中で葵さんが感じたのは、自身の技術研さんや作品作りをじっくりと行いたいということ。そこで東京を離れようと決心したそうです。

籐工芸を広めるために

1987(昭和62)年に三和町に引っ越した後は、芸術活

動の傍らで籐工芸やフラワーアレンジメントの講師として活動する毎日。「ゆっくりと制作をしたいと思ったけれど、結果的には東京に住んでいたときと同じくらい忙しくなってしまう」と笑いながら話します。

多くの生徒と共に楽しみながら制作を行う葵さんが一番力を入れていたのが籐工芸でした。

葵さんは、籐工芸の中でも椅子や籠ではなく花や人形を作成しています。その理由は、自分の作品が日用品として使われるのではなく、特別なものとして飾ってもらいたいからだと言います。

技術と思いをつなぐ

籐工芸やフラワーアレンジメントの技術が評価され、1996(平成8)年のアトラントオリンピック開催の際には、世界の文化紹介として葵さんの作品がポストカードになって展示されました。

また、今年開催されたモンゴル平成の和魂継承芸術展では蒙日文化振興芸術褒賞を受賞するなど、その技術は世界

籐工芸とは

江戸時代後期に生活用品として広く普及。軽く、硬くて丈夫という特性を生かし、家具調度品として使用されている。

で認められています。籐工芸やアートフラワーを多くの人に広めたいという思いから、忙しい中でも普及活動が続けてきた葵さん。自身の講座の卒業生が自分に代わり工芸文化を継承してくれているので、今度こそは、自身の作品をゆっくりに制作したいと話す姿が印象的でした。



▲5月の芸術展で入賞した作品と賞状